

長嘯子血縁の人々

松 田 修

はじめに

「挙白集」第一巻に「立春」と題して

出る日もけふはうららにいさなきのみことわすれぬ春の明け
ほの

とある。歌意平明に似て、しかも何か納得しがたいところがある。その納得のゆかぬ原因は、立春と伊弉諾尊のむすびつきの唐突さにあるのではないか。私のいうこの不審は、当代文学のまさしく聖書であった「古今伝授」が神道に深く纏綿していた実態への認識によって晴れるであろう。この歌にいう「いさなきのみこと」とは、「古今伝授」の説く歌道宗元伊弉諾尊の檀原における興言をさすものと思われる。そして「古今伝授」の歌道とは

歌道者王道 王道者神道

の理論によって、歌・神一如の思想に貫かれていたのである。従って、長嘯子のこの歌は、立春という、万物がおのがじし生命感にあふれる時点のうららかさを、天地開闢の悠久に想いを及ぼすことによって表現したものであろう。しかし、長嘯子を私は今まで反伝統的な、革新的な歌人として捉えてきた。私の描き来った長嘯子像とこの歌の背景をなす長嘯子像とはくいちがいがある

のではないか。たしかに長嘯子は革新的である。しかしその進歩性・革新性は、どこまでも彼のおかれた状況のさまざまな制約の中における進歩性・革新性である。我々は長嘯子の蒙った制約（たとえば人間関係）に盲目であってはならない。一見無関係のように、むしろ背反する関係とさえ思われる神道さえも、実は長嘯子に相当深く関係づけられていた。それはある意味で生活的なものでさえあったようである。以下私は長嘯子と神道からはじめて長嘯子周辺の人々二、三についてささやかな報告を送る。

一 長嘯子と萩原兼種

長嘯子の子供について我々は極めて貧困な報告をしかもっていない。そのなかでも男性はわけて溷れているようである。今までに知られているのは、「きならしころも」（「挙白集」巻九）にかかれた夭逝した男児、「兵家茶話」にのべられた侍従（菅勘兵衛）、小高敏郎氏のあげられた木下伴斎の三人にすぎない。私がおこにあげるのは、長嘯子研究で今日まで全く存在を知られなかった一人、すなわち萩原兼種についてである。

近世初期の神道界の第一人者はいうまでもなく萩原兼種であった。

その兼従の子には普通員従が知られているが、「^{あれみ}視吾堂先生行状」中巻には今一人兼種があり、しかも同人は実は木下長嘯子の子として記されているという。果してしかりとすると、我々は長嘯子の系譜に新しい名をかきくわえうるであろう。しかし、この記事は信ずべきであらうか。萩原兼種のことをいうためにはまずこの兼従（大日本人名辞典その他カネツグと訓んでいるが、鈴鹿家記録・慶長四年九月五日の項に「則兼頼（兼従）豊国へ御スワリ被為候」とあるから、カネヨリと訓むべきであらう。「塩尻」や「俗神道大意」も兼頼とある。）を語らねばならない。

兼従は、左兵衛佐卜部兼治二男、母は細川幽斎の女、神祇大副吉田兼見（祖父）の養子となり、さらに豊国大明神の社務職として萩原姓を称した。

この記事からも明かなように彼は幽斎の外孫に当るのであるが、その幽斎は長嘯子にとって最大の師友であり、しかも幽斎の女は長嘯子の弟木下右京大夫延俊（豊後日出藩主）の妻であった。即ち、兼従と長嘯子はすくなくとも姻戚の關係にあったのである。しかも兼従は長嘯子の義理の伯父豊臣秀吉を祀る豊国社の神官であった。事実兼従は、元和元年豊臣家の滅亡に際しては社領一万石を没収され、さらに豊後へ配流されようとさえたのである。このようないわば運命共同体的な萩原家へ長嘯子が孤を托すことは大いにありえたことではなからうか。もとよりこの兼種の名は「視吾堂行状」のみにみえ、他に記載はない。しかしそれはむしろ日かげ者長嘯子の血肉をわけたものとしての宿命ではなからうか。「萩原ぬし人となり敏く明らかにして物に私なし」と「視吾堂行状」に評された兼従に暗いさだめのわが子をゆだねることは、「明德」の聞えたかい（「難々挙白集」）長嘯子にして

なしえた賢明な判断ではなかったか。

しかも我々はさらに今一つの資料を持つ。長嘯子の子は多く若くして死んだようであるが、なかに「うなる松」（「挙白集」巻十）で長嘯子とその夭死を慟哭した女三は、父がよせた悲哀の情の切実さによって知られている。

長嘯子の室は作州津山十八石の領主森忠政の姉宝泉院であった。三はその腹ではなく継室の子であるが、彼女に關して「森家御系図」（旧津山大年寄玉置家所藏）は次のように伝えている。

勝俊御子数多有之内御女子梅と申候ハ豊国之神主萩原図書ニ給由寛永四年三月十五日十七才ニ而御死去 春光院殿万花紹上大姉

もちろんこの系図には三を梅と誤まるなど、必ずしも信じがたい点もあるが、萩原図書とは兼従または員従をさすものであらう。この系図もまた全くの妄誕となしがたい。兼種・万花紹三大姉、共に長嘯子の子であり共に萩原に關係づけて考えられている。かたがたその間の隠されたる事情を察すべきであらう。

ともあれ、この兼種または紹三大姉の義理の親たるべき兼従は前述の如く神道における権威者として一世に鳴ったのである。その道統は吉川惟足に伝えられたが、この吉川惟足が鎌倉から上洛して萩原兼従に入門したのは長嘯子没後の承応二年秋九月三十九歳の時であった。

その旅宿は大徳寺玉林庵であるといわれるが（^{あれみ}視吾堂行状）いかがであらうか。彭耆館蔵の松田如閑書簡には次の如くある。

（西田長男「神道史の研究」二四八頁）

一、^{イシノ}惟足儀如 御意いにしへは日本橋^{フナバシ}辺ニ商売仕罷在候者、^{ジャクセン}若年より少哥道を心かけ申候ニ付、商売をやめ心静ニ日をつく

らし申度と存立申候て、もはや十ヶ年あまりも鎌倉へ隠居仕罷在由に御座候。哥道ニハ神道を本と仕候事多御座候故、なにとそ仕神道承度とて所々にて神書之儀とも承見申由に御座候へとも埒も明不申候故、此五六十年以前爰元へ罷上色々才覚仕萩原方へ参神道之儀なけき申候。少手さはり見被申候へは、下地神書ともはし／＼見申候故か、道理もさとく第一執心ふかくなけき申候。其身のとりをきもおもしろく仕候とて萩原殿感被申候。(中略)元来此者之儀ハ大徳寺清岩和尚幼少よりよく被存候との事に御座候ニ付、萩原清岩とは旧友之御事故、委清岩へ聞届被申候。又ハ哥道に付公家衆へも出入申候所御座候間、公家衆へも様子被二聞届一候ての御事に御座候(下略)

右の書簡は十分に信頼するに足るものといわれているが、筆者がこの書簡をひくのは惟足自身についてのべるためではない。これによると惟足の萩原家入門の最重要な紹介者は大徳寺の清岩和尚であった。彼は同寺高桐院住職であるが、高桐院とは実に細川家の菩提寺であり、しかもまた長嘯子室の実家である森家とも一方ならぬ因縁があった。即ち高桐院過去帳によれば

六日 奥村十左衛門清岩和尚之兄

実堂和尚(筆者注、高桐院四代目)之父於大坂城討死

桃陰宗仙居士 元和元乙卯年五月

五日 養雲院秀嚴宗松大姉 寛永三丙口年二月

織田因幡守之室 清岩和尚之養母

とある。これによれば清岩は、おそらく豊臣方として討死した者の弟であり、かつ彼の養母は織田因幡守の室であるからには、そ

の養母の実子森忠政の室於岩とも義理のきようだいとなるわけであった。しかも忠政の姉は長嘯子室宝泉院なのである。於岩の弟は名古屋山三郎であり、その位牌と墳墓共に高桐院にあとをとどめて今に至っている。高桐院と名古屋山三郎に関しては筆者もかつて「異端の系譜」(「間」二号)にふれたことがあり、室木彌太郎氏も深く論ぜられたことがあった。宝泉院の項でふれるが、二世山三郎は宝泉院屋敷に養われたものと思われ、かたがた清岩と長嘯子一門の因縁はあさからぬものがあつた。その清岩は萩原にちなみ深く惟足を紹介したのである。清岩と萩原をつなぐものに故人長嘯子を想定することは十分に理由があるであらう。長嘯子実子・兼従養子の兼種についてふれるものが、惟足の「視吾堂行状」のみであることも興味深い。もし想像を逞しくするならば、鎌倉山に哥道に専心すること十年の惟足は生前の長嘯子、晩年の長嘯子に私淑する弟子であつたかも知れない。下河辺長流がそのように想定されるところ。ともあれなぜに萩原は清岩の旧友なのか。このような些末的な人間関係にまで長嘯子の存在は影をなげかけているのではあるまいか。このようにみる時、あまりにも断片的な資料ではあるが、その資料をつなぎあわせることによつて長嘯子とその男兼種を萩原家に委ねたことはほぼ信じてよいのではあるまいか。後述の長嘯子嫡子侍従菅勘兵衛が一に萩雲平と称したとつたえられることも長嘯子と萩原家の関係を思わせるものである。もちろんこの推測の正否は今後たとえば吉田家雜掌の日記「治定記」を検することによってある程度まで明らかにあらう。本稿は従つて中間報告に止まるものである。

二 侍 従

長嘯子の子については、「野史」ひくところの侍従（菅勘兵衛）が比較的知られている。「野史」の記事は「兵家茶話」にはほとんどよっている。すなわちその第二巻「木下少将勝俊子孫之事」には次の如くある。（大惣本による）

（前略）嫡子を侍従と言同しく京都に住し給ふ美作の大守森内記ハ長嘯子に由緒有故侍従作州に趣き森家の扶持を得給ふ或時内記在江戸の留守に家中の出入有り侍従一方の荷担せられし故内記の見限りを得て又京都に帰り給ふ其後筑前の黒田侍従を呼取三千石の采地をあたえて菅勘兵衛と改め島原表にても聊戦功有しか黒田家の家老栗山大膳と言者筑前を立退時勘兵衛栗山と縁家故同しく筑前を立退又京都に帰りに終に京都にして病死也。其子伝右衛門と言木下右衛門大夫の京都の屋敷に閑居す。後雉髪して素庵（活字本系庵）と言子孫なく跡終ると也 下河原泰意仰也

この記事は疑うことなく引用されているが（宇佐美喜三八博士「近世和歌史の研究」）、果して疑問の点はないであろうか。

森内記は森忠政（長嘯子室宝泉院の弟）の外孫であり、忠政の養嗣子となった。すなわち長嘯子夫妻にとっては名目上の甥であり、侍従にとっては同様の意味の従兄弟であった。彼が内記と称し襲封したのは寛永十年であるから当然侍従が内記に仕えたのは寛永十年以後であらねばならない。

ところが侍従は浪人し帰洛後黒田藩にありつきながら、栗山大膳の騒動の為又立ち退いて京に帰ったという。しかしこういう経歴はありえないであろう。

黒田騒動は寛永九年大膳が訴え出たことから表面に出て十年三月十五日大膳の南部侯御預けにて落着している。侍従はわずか三

カ月の間に森・黒田両家につかえ、二つのお家騒動にまぎこまれ二度京にかえらねばならない。しかも正確には内記の襲封は実は寛永十一年であり、侍従は時間を逆行せねばならぬ。

さらに島原の戦争は寛永十五年のことであり、黒田騒動落着後六年目のこと、この時黒田藩士として戦功を樹てたというのはこの叙述に沿うかぎりナンセンスであろう。もちろん侍従の存在そのものは疑いえず、また黒田藩にも仕えたようである。その証拠に、後述宝泉院の項でふれるが、長嘯子室は元和八年卒するまで筑前住の「勘兵衛むすめ」を養っていたのである。

その勘兵衛とは当然菅勘兵衛であり、ひいては侍従であろう。そのことは四項にゆずる。

三 四夕・残生

「顯伝明名録」第十「無類名」の部に、帝国図書館本として

四夕 東山長嘯息 洩生

とある。この洩生はおそらく大徳寺高桐院蔵「一黙稿」中に見える長嘯の息残生の誤りであろうか。

「顯伝明名録」の祖本というべき「類聚名字抄」（陽明文庫蔵本）には

四夕 東山長嘯息 残生

とあり、この推定の誤りならざるを証するものようである。そしてこの四夕残生とは、京都叢書に見える木下暫世古松子とおそらく同一人であろう。この人が小高敏郎氏のいわれる木下伴斎とどのような関係であるか、他日の精査をまちたい。

四 宝泉院

長嘯子をめぐる女たちは一体幾人いたであろうか。我々はそれを明かにする資料をもたない。長嘯子の子として伝えられる人々、徳川家康第五子武田信吉室、山崎甲斐守家治室、阿野大納言公業室、「きならしころも」の男子、「はまのまさこ」(「挙白集」巻九)の女子たち、の生母はいずれもさだかでない。わずかに家治室の母が某氏であり、「うなる松」の万花紹三大姉の母が継室であつたことのみ知られている。

「津山妙願寺過去帳」によれば

宝泉院殿桂岩宗昌大姉 元和八年 壬戌 四月六日 木下勝俊ノ室忠政ノ姉

とあり、長嘯子に先立つて早く没したことが知られるのである。「大徳寺三玄院勤行回向簿」にも同様の記事がみえ、この忌日は疑いえない。

「森閑宗廟由来記」には幾分信用しがたいふしもあるが、

宝泉院 於梅 若狭守勝俊夫人

現号称於梅則忠政侯之姉姫従四位少将羽柴若狭守豊臣勝俊卿之夫人也(中略) 元和八壬戌ノ年六月六日洛陽東山(ママ) 於靈山卒(下略)

とある。俗称於梅とは信じてほぼ可であろう。「三玄院大成院夫人宝泉院葬式ノ引導文」は大徳寺の一黙子春屋宗園・円鑑国師作るところ。右は「桂岩宗昌活下火」と題して次の如くある。

只合終身久昌桂 何図花屋落泉台 秋鶯唱
起 還郷曲驚破深閨殘夢来
夫惟

桂岩宗昌大禅定尼 女丈夫義 賢君子才
活機自由 欺瞞凌行婆呼小使

受用堅確 罵辱捻持尼 為輿僮

截断紅塵 脱枷鎖 勤修白業擲貨財

説甚五障幽雲 朝霞吹朱槿

論甚三從愛水 夕雨洗蒼苔

鏝湯炉炭一喝と倒 劍樹刀山一撃と推

恁麼不恁 广木人拍手 露桂懷胎此是大禅定

針鋒頭上遊戲三昧 夏郎令婦家穩坐底一

同荷剪裁

拳火把打円相云火袖 蓮花朵と開喝一喝

宝泉院没後忠政がおそらく元和八年に指令した文書はかつて「間」においてふれたが、今一度全文を紹介しておく。

去月廿三日之書状参着具に令披見候

一宝泉院殿借銀有之由何れも当秋之約束に仕置候而借銀数年之利足積候故種々之儀を申候へ共色々理申候而大略之旨本分ニ究置候由其内ニ大文字屋宗味手前之借銀ニ者利足式貫目付候而本利合五貫目ニ而可返弁と申渡則其方借状仕替候て置候由宗味ハ同心不仕候へ共女房衆に借状を渡候而置候由大略五貫目ニ而可相済かと存候由右之銀子年内中ニ相済し候は、其方のほり候而随分極可申由尤候左候ハ、銀子可申付候間何レも借銀共相済候而可然候則富田権之丞も可指上候間召連罷上候而彌念を入相究尤候

一大徳寺ニ而借銀本五貫目有之由是ハ天下とくせいニも済候物有之由紫野寺中より被申候付我等聞き候而からは六ヶ敷候ハんと存下候にて色々理申候而無利足本ニ埒明候てかへり切手を請取候而置候由尤候

一右之外少宛借限又ハ買物などの代銀有之候を書付越候通令披

見候是又彌穿鑿致次第ニ則返并可申候

一 勘兵衛むすめ一人宝泉院殿屋敷ニいまた居候由是ニ下おんな四人付候而置候由是ハ勘兵衛所へ帰度候はん間可遣候乍去年内者余月無之候間来春下可申候筑前へ下候ハ路次之用意ハ此方より可申付候間左様ニ想得可申候

一 吉兵衛勝右衛門山三郎此三人ハ久敷者之儀候間以来直座敷之番共申付候様ニと被仰置候由吉兵衛勝左衛門事ハ屋敷之番を可申付候間則扶持方可遣候

一 山三郎事ハ若キ者に候間似相ニ奉公も仕候ハんと申候ハ、其身成次第に可仕候

一 宝泉院殿被召遣候女之分そうしんきやくせんそうしゆ此四人有之由そうしんきやく事ハ年寄之者ニ候間似合ニ扶持方を遣候て屋敷ニ置可申候乍去そうしんきやくとハちかい候間よそへ参りにあひニ奉公も可仕と申候様ニも候ハ、相尋候而そうしん次第ニ可仕候せんそうしゆ事ハわかきものゝ事ニ候間にあひに定而有付度し候はん間いとまを遣可申候乍去どれも年内に何方へ参候事もめいわかり申候様候ハ、先屋敷ニ置候様ニ可然候

一 屋敷も広ク候ニ付下男五人などに今に番を申付置候由尤候右五人之者先 年内中ハ置可申扶持方も可遣候

一 宝泉院殿被仰置候事書留候而置候由此方へ可指越候へ共飛脚ニ候間路次ニ落散し候へハ如何と致延引由尤候知行之事屋敷之事又半長持一さは是ハ存命之時封付候而有之故其儘久徳藏ニ預置候由何も申越通得其意候也

尚々勘兵衛むすめ事来春可下候慥成者も無之候ハ此方より人を付候て可遣候間左様ニ相心得可被申候次ニ山三事

今俄ニ何方へ参候事も迷惑かり候様ニ候ハ、先々年内中ハ屋敷ニ置候而尤ニ候かしく

十一月廿四日

美 忠政

(花押)

妙願寺殿

侍従の項でふれたように、書簡中の勘兵衛は侍従菅勘兵衛であろう。すでに「兵家茶話」の説がまさに一片の茶話にすぎぬことは前述した通りであるが、しかしながらこの元和八年に視点をおく時、この頃勘兵衛が筑前黒田家に仕官していたことはおそらく事実であろう。すなわち誤謬は誤謬なりに全くの無稽の説ではなかったのである。それにしてもおそろく年上の(宇佐美博士は四歳乃至十一歳の年長としておられる。)ついに夫に顧みられぬ妻の死は孤独以外の何ものでもあるまい。勘兵衛の娘や山三郎の遺子蔵人山三郎(隼人佐父)を養ったという事実にも鬱積した女のやるせないさがうかがえよう。前引「森家御系図」には、次のことある。

一 勝俊伏見ニテ場ヲ外シ助命ノ事アリ内室之ヲ見限り髪ヲ切り左ノ歌ヲ添送ラレ法躰セラル

命やハうきなからへて何やらんまみへぬために送るきりかみ

そのことごとくが正しいとはいいいがたいにしても、冷たい夫婦関係の一斑の事情は伝えているのではなからうか。

五 紹 叔

宇佐美博士は「藩翰譜」の紹叔に関する註記「僧玄周号叔西堂住建仁寺中常光院云々」とあることから「紹叔については今詳し

く究め得ないが（中略）長嘯子の弟紹叔の存在は必ずしも怪しむべきでない」とされた。

今「高台寺誌稿」によると、その「創立由緒及沿革」の項に「建仁寺常住院住職三江和尚ノ弟子周南紹叔ハ高台院ノ姪木下家定ノ末子ナルヲ以テ（中略）三江ヲ住持トシ紹叔ヲ西堂トス未タ幾ナラス三江ハ建仁寺ニ歸リ紹叔ヲ住持トス之ニ依テ本寺永ク建仁寺未トナレリ」とある。すなわち、建仁寺三江の弟子、家定の第七子高台寺住職としての紹叔像が浮び上るであろう。

高台寺のご示教によれば「当山第二世中興周南紹叔西堂禪師」は、「寛永十年癸酉二月十一日」入寂のよしである。年二十二歳と伝える。ただしこの第二世とは、おもうに高台寺の臨濟改派（元和八年八月）以後三江・紹叔と数えてのことであろう。「高台寺誌稿」によれば、慶長十一年曹洞の寺院としての開山は弓箴和尚である。さらに寺伝の二十二歳は諒解しがたい。何故ならば寛永十年（一六三三）二十二歳で没するためには、慶長十七年（一六一二）の生れでなければならぬ。しかるに紹叔は、家定の末子であるが、その家定は早く慶長十三年（一六〇八）に薨じているのである。従ってこの享年はおそらく誤りであろう。なお、宇佐美博士が引かれる如く、「藩翰譜」には「寛永十年二月五日寂干備中賀陽郡法明寺」とあり、高台寺過去帳と日においてわずかにずれている。法明寺はいまだ明かにしがたいが、当然、長嘯子の弟、紹叔には兄、家定二男利房が、元和元年封ぜられた備中賀陽郡足守の寺であろう。俗縁を辿っての旅に、ゆくりなく訪れた死ではなかったか。ちなみにこの利房も四年のち寛永十四年六月二十一日六十五歳で卒し、高台寺円徳院に葬られたのである。

おわりに

「長嘯子血縁の人々」と題したが、その五項目はことごとく中間報告に終始してしまった。長嘯子血縁の人々はお多い。とりわけ家定六男俊忠、三奈木黒田一春室となった曾孫春光院など、是非触れねばならぬ人々である。稿を改めて詳しく論じたい。血縁の人々への考察はやがて当然血縁をこえた、長嘯子をめぐる人々への考察に発展し、それらは更に、長嘯子その人への考察に回帰するであろう。本稿はその為の、ごく不用意なデッサンにすぎない。

本学助教授

なお本稿作製にあたって、森嵩正氏、高桐院上田義山氏、高台寺住職・陽明文庫小笹喜三氏のご示教をえた。附記して謝意を表する。